

巻頭言

コロナ禍も2年目に入り、4月末に緊急事態宣言が出たあと、数回の感染拡大を繰り返し、年度末には大規模な（しかし軽症者が多い）第6波が到来しました。研究室も、年度初めにコロナ感染のためしばらく閉鎖となりました。コロナワクチンの接種が年度内に3回行われました。大学の講義は対面授業が再開され、大学行事もほぼ以前の体制に戻りました。

研究室状況に関しては、昨年に続き、苦難の一年でした。年度前半は学生の問題で大変にごたごたし、今となっては、この間に自分が何をやっていたのか思い出せないほどの精神的労苦がありました。学科内でも似た状況が増えてきたことは、他の多くの先生方も指摘しています。いっぽう、年度後半は論文執筆に尽力しました。この状況下、これまでまとめることができなかった懸案の論文を、いくつか完成させることができました。ビフェロセン混合原子価錯体の原子価に関する（おそらく）最後の論文が完成し、感慨深いものがあります。イオン液体に関しても、ビフェロセニレンのイオン液体化、融けるイオン液体含有配位高分子、など重要論文がいくつか完成しました。春に刊行されるイオン液体の書籍（大内先生監修）の分担執筆も進めました。卒業生の堀越博士との論文共著も嬉しい作業でした。論文作成は、毎回毎回大苦戦ですが、年度末にかけて、まさに全力疾走の日々でした。

研究に関しては、この2年間で、金属錯体系イオン液体の全体像が見えてきました。①液体における錯体化学の展開、②外場応答性イオン液体の開発、③配位高分子・ポリマー・ゲルへの展開、の3領域が揃いました。主テーマである機能性イオン液体の開発を中心に、裾野が格段に広がり、位置付けが確立してきた感があります。周囲の研究を見聞きする限り、学生のテーマには改良型研究が多いように感じますが、改めて振り返ってみると、研究室では常に、理学的研究・学術研究として価値のある、広範な研究展開ができてきたと感じます。これは、研究基盤を拓いてきてくれた卒業生のおかげでもあります。分子性導体・磁性体研究の盛衰を見てきた経験から、イオン液体研究の今後の動向も気になりますが、金属錯体系イオン液体の研究はまだまだ大展開の余地があります。しかし制度上・体制上の問題で、大規模研究ができないのは残念なところです。

研究室では、D2とB4の計2名の学生が研究活動を進めました。5月末には6th Iberoamerican Meeting on Ionic Liquids (IMIL2021, Virtual conference) が行われ、私とD2学生が参加しました。私自身がKeynote講演を行い、海外の研究者にアピールする良い機会でした。主催国はチリで、日本時間では深夜の開催となったためか、他に日本人は皆無でした。学会に連動して、ウェビナーが1年間にわたって毎月開催されたのも有意義でした。11月にはイオン液体討論会（オンライン）が開催されましたが、卒業生の舟浴博士が受賞したのも大変嬉しいことです。なお学科では初めて1年生向けの「化学実験入門」が開催されました。研究室でも2名の参加者がおり、D2の角谷君が実験指導を担当してくれました。

学科運営に関しては、カリキュラム改訂WGの座長としての作業がありました。6年ほど先に、前後して学科内の多くの先生方がまとまって退職を迎えますが、教員の補充は十分なされないと予測されます。この事態に対応できるカリキュラム案作成の必要があり、心理的負担が大きい作業でしたが、最終的には現実的なプランがまとまって安堵しています。

2月末にはウクライナ紛争が開始しました。予想外の事柄が起こるものです。早期解決を祈りつつ。

(2022年3月 持田)